

市田清兵衛文書「日記」にみる高崎出店と奉公人

桂 浩子

はじめに

八幡商人の市田清兵衛家は宝永四年（一七〇七）上州高崎に店を構え、大正三年（一九一四）の閉店まで二百余年にわたり同地で商いを続けた商家である。

同家の史料は滋賀大学経済学部附属史料館に「市田清兵衛文書」として収蔵され、店則や明治期の帳簿類のほか歴代当主の日記や日誌が文化元年（一八〇四）から明治三十九年（一九〇六）まで約一〇〇年分のこざれている。また文政六年（一八二三）から明治元年（一八六八）までの主要な出来事は「年々記録上」、「歳々記録下」としてまとめられ、これらの史料をもとに同家の家訓や店則^②、明治期の経営や奉公人の雇用状況、土地経営などが明らかにされてきた^③。

市田家当主の日記には日々の天候や家内外の出来事、取引や商品の相場、奉公人の動向など様々な事柄が記され、既存研究にも用いられてきた^④。本稿では主として九代目、一〇代目の日記から当主の行動や高崎店に勤めた奉公人の実態を明らかにするものである。第一章では第一節で市田家の概要と歴代当主について、第二節で九代目、一〇代目個人と日記の特徴を述べ、第三節で旅記録から八幡―高崎間の往來を明らかにするとともに同行者などを比較している。第二章では高崎店に勤めた奉公

人について、第一節で召し抱えから在所登り、第二節で不埒や解雇といった不都合の事例とともに、第三節では市田家当主と奉公人の関係にも触れている。

第一章 市田清兵衛家の日記

第一節 市田家の概要

市田清兵衛文書「市田家略記」^⑤によると初代市田清兵衛は慶長・元和年間に八幡の新町四丁目（現滋賀県近江八幡市新町）で小間物商を営んだとされ、初代の長男が孫兵衛家として分家、長女に養子を迎え二代目とした。濃州・信州方面への行商を行うようになったのは二代目で、三代目のころには中山道安中に止宿し上州一円へ行商したほか、糸や真綿を仕入れ名古屋や京都に販売したとされる。上州において近江商人の進出が目立つようになったのは一七世紀末ごろとされ、糸市が開かれる城下や町を拠点に近郷農家へ小間物や日野椀、太物、古着などを売り、生絹や生糸、麻を買いつけていた^⑥。中山道の脇往還である下仁田道に位置した西牧関所^{さいまぐわん}では元禄から享保期の記録に近江から麻買いのため上州方面へ向かった商人の名前がのこるほか、一九世紀はじめには高崎城下にこうした「上州持下り商人」のための定宿があったとされる。

市田家の三代目が安中から高崎へ拠点をうつしたのは宝永四年のことで、高崎田町（現群馬県高崎市田町）に店を借り、屋号を麻屋として太物・高宮布を売買した。のちの享保一〇年（一七二五）には質物を、明和七年（一七八七）には瀬戸物の扱いを始めている^⑧。その後三代目は長男に四代目を継がせ、四男は利助家として分家させた^⑨。宝暦二年（一七五二）には四代目の長男が五代目を継いだものの子供がおらず、

と各々がのこした日記の特徴を述べる。

第二節 市田家の当主と日記について

九代目の市田清兵衛（直徴）は益田村（現近江八幡市益田町）益田又四郎の三男源之助で、天明七年（一七八七）に市田家の養子となった。天明九年に六代目の娘そえと結婚し、寛政四年四月に九代目を相続した。二年後に妻が死亡し、寛政七年にその妹ちさと結婚。子供は長男長治、次男為吉をあわせ二男七女をもうけている。このうち息子二人については兄長治を文化六年（一八〇九）四月に、弟為吉を文化一三年（一八一六）六月にそれぞれ高崎店へ連れ下り、その後も幾度か高崎と八幡を往復させていた。⁽¹⁾

また九代目は寛政一三年（一八〇二）に八幡町の惣年寄頭取役を領主朽木氏より命じられ、文化五年（一八〇八）にも惣年寄役を仰せつけられている。⁽²⁾ 同時期は八幡で御朱印騒動が起こり、九月には町衆の代表者として江戸へ赴いたが、一〇月末から体調を崩し十一月九日に客死した。⁽³⁾

一〇代目市田清兵衛（直良）は九代目の長男で、相続前の名前は長治である。彼については九代目の日記にも記述がみられ、近隣の年礼に連れていくほか他家の法事に遣すなどしていた。文化六年には高崎店へ下り、文化八年に元服。その後も何度か八幡と高崎を行き来していたが、文政五年に父である九代目が死去し、翌年一月市田家の寄合である蛭子講で相続が決定した。妻は先代の実兄益田紋司の娘りかで、文政六年には娘恵起が誕生している。翌年妻は死去し、後妻に迎えたうたとのあい

市田家の歴代当主のうち本稿で取りあげるのは九代目と一〇代目で、前者は寛政四年から文政五年（一八二二）まで、後者は文政六年から嘉永二年まで高崎店の経営にあたった人物である。次節では両当主の概要

分家孫兵衛家を継いでいた四代目の次男を六代目とした。七代目は六代目の長男が安永七年（一七七八）に一五歳で継いだ⁽¹⁾が、その四年後に死去。その弟も若年であつたため六代目の後妻が跡目相続をした。このころ高崎店では享和四年（一八〇四）に足袋商いをはじめ、安政六年に鉄物の店を開店。安政七年（一八六〇）の記録には「高崎店商売質物絹麻古手瀬戸物豊表鉄物類」とあるように事業を拡大していった。⁽²⁾ 寛政四年に九代目を相続したのは近在の益田家から迎えた養子で、その長男が一〇代目となった。一〇代目の子供はいずれも早逝し、高田家より迎えた養子を嘉永二年（一八四九）一一代目としたが、文久二年（一八六二）七月に高崎店で死去。一一代目の長男もすでに死去していたため名義人をたて、隠居した一〇代目が経営を指揮した。一三代目には一一代目の長女に蒲生郡山之上村の森家から養子を迎え、明治四年（一八七一）に相続させた。このころの高崎店は明治八年と一三年に類焼、一六年には瀬戸物の商い不振により一時休業する事態となるなど、その経営は順調とは言い難かった。明治二九年（一八九六）、一三代目の息子が一七歳で一四代目を継いだ⁽³⁾が三年後に死去、奥田家より迎えた養子が明治三一年に一五代目を相続した。高崎店では明治三三年には絹方が大損害を出し、家法改革もなされたが大正三年に閉店。その後大正四年（一九一五）に一五代の長男が一六代目を、大正八年にその弟が一七代目を継いだ⁽⁴⁾がどちらも短命で、一五代目の長女が昭和八年（一九三三）に一八代目となった。

だにも四男四女をもうけたが、娘久満をのぞきいずれも早逝。このため天保一五年（一八四四）に高田嘉兵衛家から小四郎を養子に迎え、妹である九代目の娘知恵を養女に改め結婚させた。嘉永二年一月に小四郎へ一代目を継がせた後は譲介と改名、安政二年（一八五五）には剃髪し、安政三年には還暦の祝いをしている。しかし文久二年七月に一代目が死去し、その長男祐太郎も同年三月に死去していたため本家に男児がおらず、親類相談のうえ家表の名前を一代目の娘のふと定めている。その後長年高崎店の経営に携わったが、明治三年一月に死亡した。

市田清兵衛文書には文化元年から明治三十九年まで一〇九冊の日記や日誌のこされ、それぞれ表紙には年号や市田の名字、「直徴」や「直良」といった当主の諱が記されている。いずれの日記も正月一日からはじめられ、来客や近隣の行事、高崎店の状況や商品の相場などその記述は多岐にわたる。

本稿で取りあげる九代目は文化元年から文政五年までの一九冊、一〇代目は文政六年から安政五年（一八五八）までの三六冊がのこり、これは日記群の中でも最多であった。両当主の日記は他の日記と同じく正月一日からはじめられ、天候と日付につづき様々な事柄が綴られていた。家内外の出来事や商況など、内容について大きな違いはみられなかったが、九代目については文化三年や文政五年の日記が途中から空白になっているほか、日付や天候のみが書かれた日も散見された。これに対し一〇代目は一日の記述が複数行にわたることが少なくなく、日記そのものも厚みのあるものが多くみられた。

また九代目の日記には「吉田にて茶稽古」、「手前にて開炉」など茶の稽古や、「西光寺にて蹴鞠」といった記述がみられ、茶や花、蹴鞠や詠

草など幅広く嗜んでいた様子もうかがえた。なお文政五年の日記には「此夕長治濃茶稽古」とあり、一〇代目も茶を嗜んだことがわかるが、一〇代目の日記には稽古事の記述は確認できなかった。

市田家において日記の執筆が当主のつとめとされていたことは、同家の史料にのこる日記群からも明らかである。代々の当主は家内外の出来事や商いについて幅広く書きのこしているが、その記述量は当主ごとに異なり、右にあげた茶の稽古のように書きのこす事柄についても取捨されていた様子がうかがえる。また一〇代目の天保五年一月七日の日記には「日記取調記録帳二写ス」とあり、同様の記述が六年、七年にもみられた。この「記録帳」が「年々記録」であるのか、調べた日記が何代目のものであるかは不明だが、市田家において当主の日記は過去を調べる手段として位置付けられていたと言えよう。

次節ではこうした日記から高崎や八幡への旅記録を抜粋し、九代目、一〇代目の当主がおこなった八幡―高崎間の往來の実態を明らかにする。

第三節 八幡―高崎間の往來

当主の日記には高崎店や京都、大坂などへの旅記録のこされ、そのほとんどで同行者や宿泊先などが書き留められていた。次にあげるのは文政七年（一八二四）六月に一〇代目が高崎へ下った際の記録で、六月二二日に八幡を出発し、二日後に名古屋に到着。一泊した後は中山道をたどり七月三日に高崎店へ到着している。

〈史料1〉

廿二日朝曇り四ツ時分晴ル大ニ暑し今朝出立上州へ発向供新太郎柏

原銭屋止宿

廿三日天気よく大暑八ツ時土用ニ入御越問屋ニ泊ル

廿四日曇り八ツ前少々雨降昼時二名古屋白徳へ着京柝茂分引取候絹

無事着之趣之元付相渡ス堀田へ参り為大丸預ケ候様引合置尤

先方ハ閏八月分預ケ度趣之依之先八月分預り被下様申置白甚

麻代へ木へ相渡候様並三軒麻盆前二片付候様頼置国状差出ス

廿五日天気よく大ニ暑し名古屋発足高山尾張屋泊り

廿六日天気よく中津田丸屋ニ止宿

廿七日曇り十曲峠分雨降妻籠にて晴ル須原糺屋泊り

廿八日曇り立町分雨降出し大雨ニ相成夜中降通ス奈良井住吉屋泊

廿九日雨天本山にて晴ル諏訪泊り

七月朔日天気よく暑し芦田山浦止宿

二日天気よく暑し軽井沢槌屋泊り

三日天気よく安中分雨降夜中迄降ル夕刻着店一統無難

高崎への店下りや八幡への帰国など旅記録をもとに文化元年から嘉永二年まで八幡―高崎間の往来をまとめたのが表1である。同行者については奉公人を「奉」、他家の者を「他」と区別し、その内訳を表2で比較している。⁽²³⁾ なお、遠方に構えた店を行き来した記録は西川伝右衛門家や谷口兵左衛門家など他の八幡商人の史料にもみられるが、⁽²⁴⁾ 同行者には奉公人名が記されるのみで、他家の同行者まで明らかになるのは日記ならではの特徴と言えるだろう。

九代目、一〇代目の旅では、両当主とも経路は中山道を取り、要した日数は一〇日前後であった。⁽²⁵⁾ 文化五年や文政六年、天保九年（一八三二）の店下りのように高崎から江戸に立ち寄り、東海道をたどって八幡へ帰る例もみられたが、基本は中山道を行き来していた。また名古屋を経由することも度々あり、その際は取引先である白徳（白木屋徳右衛門）方に滞在し、同家を拠点に取引のある商家などをたずねていた。⁽²⁶⁾ 次に両当主の旅の頻度や同行者の内訳を比較する。

九代目は文化元年から文政四年の間に一六回往復しており、文化九年（一八二二）と文政二年をのぞきほぼ毎年八幡と高崎を行き来し、帰国の際は必ず名古屋へ立ち寄っていた。八幡の出立時期は四月から五月で、高崎に三―四ヶ月滞在した後、九月から十月ごろに帰国している。同行者は奉公人や他家の者など様々で、文化四年（一八〇七）の店下りには治助、繁次郎、伝吉ら三名の奉公人とともに原田金兵衛、善助、子供を含めた七名で出かけたほか、文化十一年には奉公人を連れず西谷善九郎など八幡の商人と手代衆、飛脚をくわえた八名で店へ下っていた。

一〇代目は文政六年から嘉永二年の間に八幡と高崎を一八回往復しており、多くは八幡を五月から六月に出立し、九月から一〇月ごろに帰国している。同行者には奉公人とともに他家の者も含んだが、他家の者と同道する頻度は九代目に比べると少ない。とくに八幡への帰国に際しては文政十一年と天保四年のみであり、先代のように他家の者とだけで旅をすることもなかった。また名古屋へ立ち寄る回数も少ないが、これについては取引状況などもあわせて考える必要があるだろう。

九代目、一〇代目の旅記録にのこされた奉公人は多くが名前のみであったが、「清兵衛店へ発向日野北今町市左衛門方七蔵召抱連下ル」⁽²⁷⁾ や

表1 9代目、10代目市田清兵衛の八幡—高崎間の往来

*印: 寺社参詣

年代	当主	八幡—高崎行き	同行者	高崎—八幡行き	同行者
文化元年(1804)	9代目	4月16日～4月28日* 善光寺	他3	9月18日～10月2日(名古屋)	他1
文化2年(1805)	9代目	4月24日～5月3日	奉1、他2	～9月12日	
文化3年(1806)	9代目	4月24日～5月3日	他5	6月22日～7月5日(名古屋)	他1
文化4年(1807)	9代目	4月22日～5月2日	奉3、他3	9月3日～9月19日(名古屋)	奉1
文化5年(1808)	9代目	4月29日～5月12日(名古屋)*	奉1	8月22日～9月21日(東海道)*	他1
文化6年(1809)	9代目	4月25日～5月6日* 善光寺	奉2	8月23日～9月15日(名古屋)	奉1
文化7年(1810)	9代目	5月3日～5月12日	奉4	9月10日～9月23日(名古屋)	奉1
文化8年(1811)	9代目	5月13日～5月22日	奉3、他4	9月1日～9月16日(名古屋)	他1
文化9年(1812)	9代目	5月12日～5月23日(名古屋)	奉2	8月29日～9月19日(名古屋)*	奉1、他1
	9代目	10月13日～10月22日	他2	11月16日～11月28日(名古屋)	他2
文化10年(1813)	9代目	4月23日～5月3日	奉2、他2	8月23日～9月8日(名古屋)	奉1、他2
文化11年(1814)	9代目	5月25日～6月5日	他7	9月7日～9月22日(名古屋)*	奉3
文化13年(1816)	9代目	6月19日～7月2日(名古屋)	奉1、他1	閏8月18日～9月6日(名古屋)*	奉2、他1
文化15年(1818)	9代目	4月20日～4月29日	奉1、他4	10月10日～10月26日(名古屋)	奉3
文政2年(1819)	9代目	11月2日～11月11日*	奉1		
文政3年(1820)	9代目			2月30日～3月14日(名古屋)	奉1
文政4年(1821)	9代目	4月18日～4月29日(名古屋)	奉2	9月13日～9月27日(名古屋)	
文政6年(1823)	10代目	9月29日～10月16日(名古屋・東海道)	奉1	10月23日～11月3日	
文政7年(1824)	10代目	6月22日～7月3日(名古屋)	奉1	閏8月9日～閏8月23日(名古屋)	奉1
文政8年(1825)	10代目	5月18日～5月29日(名古屋)		8月22日～9月8日(名古屋)	奉1
文政10年(1827)	10代目	5月26日～6月6日	奉2	8月23日～9月2日	奉1
文政11年(1828)	10代目	5月8日～5月28日	奉2、他4	9月3日～9月17日*	奉1、他2
文政12年(1829)	10代目	5月23日～6月5日	奉2、他1	10月18日～10月29日	奉3
文政13年(1830)	10代目	2月1日～2月10	奉1	3月28日～閏3月12日(名古屋)	奉1
	10代目	7月21日～7月30日	奉1	9月8日～9月23日(名古屋)	奉1
天保2年(1831)	10代目	6月14日～6月24日	奉2、他1	10月10日～10月21日*	奉1
天保3年(1832)	10代目	9月8日～9月18日	奉1、他4	11月8日～11月18日	奉1
天保4年(1833)	10代目	7月2日～7月12日	奉1	9月22日～10月18日(名古屋)*	奉1、他2
天保5年(1834)	10代目	6月10日～6月20日	奉1、他1	8月26日～9月7日*	奉1
天保6年(1835)	10代目	閏7月13日～閏7月23日	奉1、他1	9月28日～10月15日(名古屋)	奉2
天保8年(1837)	10代目	6月17日～6月26日	奉1	9月20日～10月1日*	奉1
天保9年(1838)	10代目	6月19日～7月1日(名古屋)	奉2	9月24日～10月28日(名古屋・東海道)*	奉1
天保11年(1840)	10代目	6月4日～6月13日	奉1、他3	8月22日～9月2日	奉1
天保15年(1844)	10代目	1月4日～1月13日	奉1	2月16日～2月25日	奉1
嘉永2年(1849)	10代目	6月8日～6月18日*	奉3	9月晦日～10月12日	奉1

(注)市田清兵衛文書 家27「日記 市田直徴 文政元」～家45「日記 市田直徴 文政5」、家46「日記 市田直良 文政6」～家53「日記 市田直良 文政13」、家54「年々記録」、家55「歳々記録」、家56「日記 市田直良 天保2」～家76「日記 市田直良 嘉永2」より作成。

表2 同行者の内訳

同行者	9代目		10代目	
	高崎行	八幡行	高崎行	八幡行
奉公人のみ	6	6	10	15
1名	2	4	7	13
2名	3		2	1
3名		2	1	1
4名	1			
奉公人、他家	6	3	7	2
奉公人1名	3	2	4	2
奉公人2名	1	1	3	
奉公人3名	2			
他家の者のみ	4	5	0	0

(注) 表1に同じ

「店出立嘉七初上り連上ル」⁽²⁸⁾、「善助二度登リ二付同道ス」のように、新たに召し抱えた者や在所登りをする者を連れたい様子もうかがえた。また天保六年には初登りの忠助とともに、不埒をおこなった儀八を連れ帰っている⁽³⁰⁾。

両当主がおこ

なった八幡―高崎間の旅では寺社への参詣も複数みられた。たとえば九代目は文化元年と文化六年に善光寺（現長野県長野市元善町）へ参詣したのち高崎へ向かっており、文化元年は八幡の箔四（箔屋四郎左衛門）と手代二名、文化六年は息子長治と奉公人二名が同行者であった⁽³¹⁾。このほか文化五年の帰国に際しては江戸を経由し、三嶋大社（現静岡県三島市大宮町）⁽³²⁾や知立神社（現愛知県知立市西町）⁽³³⁾、熱田神宮（現愛知県名古屋市中熱田区）など東海道の名所に立ち寄っていた。また奉公人のみを連れた旅の場合は多賀大社へ参詣することもあり、店下りでは文化五年と文政二年、文化十一年（一八一四）の帰国の際も立ち寄っていた。

一〇代目は文政六年の店下りで江戸心行寺（現東京都江東区深川）で先代の三回忌を行ったあと高崎店へ下っていた⁽³⁴⁾。また嘉永二年の高崎行

きでは、分家孫兵衛家の長男斧太郎⁽³⁵⁾を連れ多賀大社を参詣している。多賀大社へは文政十一年の帰国時にも立ち寄ったほか、天保九年には店の藤七を伴い東海道の名所をたずねているが、九代目のように善光寺への参詣はみられなかった⁽³⁷⁾。

市田家では遠隔地に店を設けた他の商家同様、定期的に当主が店へ下っていたが、旅の同行者については当主ごとに差異がみられたほか、参詣に立ち寄った寺社も異なっていた様子がうかがえる。

八幡から高崎店へ下った両当主は奉公人とともに数ヶ月を過ごし、同店の経営にあたっていた。次章では日記や「年々記録」などにみられた記述から、店に勤めた奉公人の雇用や昇進、不都合や解雇の事例を紹介する。

第二章 高崎出店と奉公人

宝永四年、高崎田町に開店した店ではそれまで行商で扱っていた小間物をやめ、木綿や太物、高崎布の扱いをはじめている。先述のように高崎店では様々な商品を取り扱ったが、店舗での商いにくわえ田町の絹市に仮設の店を開くほか、各地の絹市にも買いつけに出かけていた⁽³⁸⁾。こうした店の状況は八幡の当主宛てに「店状」として届けられ、日記にも「店状着」や「店状認」など定期的なやりとりが確認できたが、内容については端的な記述に留まることが多かった。なお当主が高崎に滞在した期間中は「本庄瀬戸仕入行」や「洪川掛取」といった奉公人の出入りとともに「初市例通人出無数」や「名古屋行駄絹二個荷造り」など市や荷造りの状況が詳細に記されていた⁽³⁹⁾。

高崎店の奉公人についてはすでに明治期の雇用証明書や奉公人の動向

をまとめた「交代録」⁽⁴⁰⁾、「支店人員交代録」⁽⁴¹⁾により明治一二年から三二年ごろまでに高崎店で雇用された五一人の動向が明らかにされている。⁽⁴²⁾九代目、一〇代目の日記にみられた奉公人の記述は「交代録」のように個々でまとめられておらず、断片的なものも多いが、明治以前につとめた奉公人の実態を明らかにするため、次節からは召し抱えや在所登り、不埒や解雇といった項目ごとに事例を紹介する。

第一節 召し抱えから在所登り、昇進

市田家における奉公人の雇用規定は明治二三年の「条目補遺」⁽⁴³⁾に記されており、一〇〜一五歳の者を雇い、八幡の本店で半年から一年ほどの試用期間を経て、正式に契約を交わしたのち高崎へ下らせるとしている。初登りは雇い入れから七年後で、その後四年ごとに近江へ登り、これを六度繰り返したあと別家を許すとしている。

当主の日記や「年々記録」などから文化元年から明治元年にかけて「召抱」あるいは「抱」と記された奉公人は五三名で、このうち年齢が明らかない九名の内訳は一〇〜一三歳が二名、一九〜二五歳が四名、二七歳、三〇歳、三四歳が各一名であった。また出身地が記された三三名のうち犬上郡極楽寺村や神崎郡寺村、蒲生郡八幡町からは複数名が召し抱えられていた。市田家では文化元年から五年、文政二年から八年、天保二年から一五年までは毎年一〜三名を抱えていたが、一度に複数を雇うことはまれで、多くは一名ずつであった。

新たに召し抱えられた奉公人は高崎店へ下され、記録では「召抱下ス」、「召抱同道致ス」などと併記されることも多い。たとえば文化三年一月に抱えた卯之助⁽⁴⁴⁾は一月二三日に見えたのち二六日に店へ下され、

文政二年の弥兵衛⁽⁴⁵⁾は一〇月二九日に抱え、一月二日に九代目が高崎へ連れ下っている。しかし天保一年一〇月一五日に抱えた弥三郎⁽⁴⁶⁾が二月八日に高崎へ下ったように、召し抱えから店下りまでの期間は一律ではなかった。⁽⁴⁷⁾

奉公人が近江へ帰国する「登り」については、初登りや二度、三度登りなどが記録に散見されたが、召し抱えから追跡できた奉公人はわずかに二名であった。文化一三年に抱えた友吉⁽⁴⁸⁾は文政六年に初登りをおこない友八と改名。また天保二年に抱えた庄蔵⁽⁴⁹⁾は初登りが天保七年、そののち弘化二年には高崎店の太物を担当し、二年後には別宅となり太物と支配役の兼務を申しつけられている。こうした登りの記録には嘉永七年の金兵衛⁽⁵⁰⁾のように、初登り後に「店風不相応」として解雇される者もみられた。

なお初登りの時期については安政二年九月の記録に「上州店提相改以来休日停止いたし子供ハ五節旬半日ツ、清水参り初登りは迄之通り七年目夫々四年目ニ登シ上下路用一両ニ歩渡し祝物遣シ不申尤仕着せ小遣差引残り相渡シ可申事⁽⁵¹⁾」とあり、従来通り七年目としている。明治期の「条目補遺」でも初登りの時期は雇用から七年後であり、安政以前から変更されていなかったことがわかる。

当主の日記や記録において奉公人の記述は断片的であるが、先述した庄蔵のように高崎店内で昇進した者も幾人か確認できた。文化一五年に初登りをした善助は文政七年に二度登りを、同一〇年には瀬戸方を申しつけられ、文政一二年には三度登りをし、天保二年支配役に任命されている。支配役を天保六年に退役した後は翌年一月に近江に帰り、二月に別家を申しつけられている。

また善助の後任として天保六年に支配役となった儀兵衛はその二年後に高崎店久兵衛の養子となっているが、これに関して天保四年九月の日記に次のような記述がある⁽³²⁾。

〈史料2〉

二日晴陰儀兵衛事嫁談之義違肖も無之様子二乍去病身二付明年当り
 今暫ツ、休息相勤度趣前夜申出ル依之是迄は三十六七兮四十迄も相
 勤候へとも勘弁を以三十迄と申入候事故三十迄ハ保養相勤申候やう
 三十二相成候ハ、嫁談之上年々暫ツ、休息支配相勤候様利解申入候
 所承知有之付てハ右咄し致し候へとも三十迄ハ是迄之通り明白ニ相
 勤候やう未熟之儀無之様咄し置久兵衛ハ儀兵衛と心得候様申置

右に先立ち八月八日の日記には「儀兵衛へ嫁談之義咄し置」とあり、
 縁談の件とともに儀兵衛からの申し出からはじまっている。病身につき
 天保五年から休息しつつ勤めたいという儀兵衛に対し、一〇代目は従来
 四〇歳ごろまで勤めるところを三〇歳で勘弁すること。結婚後は休息し
 つつ支配役として勤めるよう話し置いている。このち天保六年に儀兵
 衛は高崎店支配役となり、翌年久兵衛家に入り結婚した。五年後の天保
 一一年に支配役を退き久兵衛と改名した際も、一〇〇日ずつ休息しな
 がら高崎店へ継続して勤めるよう一〇代目が申しつけている⁽³³⁾。その後の
 日記でも久兵衛（儀兵衛）は八幡と高崎を度々行き来したほか備前へも
 赴いていたが、安政五年一二月に家内の病気を理由に高崎店を退いてい
 る⁽³⁴⁾。日記において奉公人の昇進に触れているのは店の寄合での任命記録
 のみであり、儀兵衛のように勤務形態を指示された例は珍しい。当主の

儀兵衛に対する期待のあらわれとも言えるだろう。

当主の日記にみられた奉公人の記述にはこうした昇進のほか、出走や
 引負、婦人掛りなどもあり、次節では奉公人の起こした諸問題とその対
 応事例を紹介する。

第二節 不埒と帰参、解雇

文化元年から明治元年にかけて記録にみられた奉公人の不埒では出走
 と引負がそれぞれ一八件、婦人掛りについては六件みられた。たとえば
 天保五年に抱えられた民蔵（一三歳）と岩蔵（一〇歳）は天保五年八月
 二三日に連れだつて高崎を出走、翌月一七日に帰村した旨が届けられて
 いる⁽³⁵⁾。このほか天保三年七月に使い先から行方不明になった安吉は街道
 の宿場から店へ連れ戻され、八月には近江の在所へ預け置かれた。また
 天保一二年閏一月に掛け取りに出かけた文七は三月末に在所へ帰ってい
 る⁽³⁷⁾。これら一八件の出走のうち、その後について記されたのは一六件。
 宿場などで捕らえられた四件をのぞく一二件の出走者はすべてが近江の
 在所へ戻っていた。先述した民蔵と岩蔵はおよそ一月をかけていたが、
 半月ほどで帰る者もあり、帰村の報せは親兄弟などから市田家に届けら
 れている。このうち天保一四年一〇月九日に出走した弥三郎は後日心得
 違いだったと申し出、「慎居候様申置⁽³⁸⁾」かかっているが、こうした処分は
 例外的で多くは在所に預け置かれている。

また天保一一年に出走した吉兵衛は二月一三日に出走し、晦日に帰村
 したことが親元から知らされた。このとき店の商品のうち反物五五反と
 帯地二六本が不足していたため吉兵衛にたずねたところ、掠め取り売
 払っていたことを白状している。その後貯金一〇両を取りあげ衣類を売

払ったのち、不足分については出情証文を取り置いている⁽⁵⁹⁾。出走時に店の品物を盗み出す例はほかにもみられ、嘉永二年には出走した新七を捕えたところ質物と金を盗んでおり、在所へ預け置いた後、同四年に暇を遣わしている⁽⁶⁰⁾。くわえて嘉永七年二月には奉公人重助により質蔵から鼈甲や簪など七八品、五〇両近い品物が盗み出されている⁽⁶¹⁾。これについては後日親である戸田忠右衛門に弁金を申付け、出情証文と重助の暇遣し証文を取り置いている⁽⁶²⁾。

高崎から出走や不埒を起こし、在所へ預け置かれた奉公人の中には帰参を許された者もいた。「年々記録」文政九年の記録にみられた源七は婦人掛りがあったものの離縁し、改心したとして帰参を願っている。翌年六月の吟味では引負が三〇両あったが、一札を取り置いたうえで質方の見習いを申し渡している⁽⁶³⁾。また天保一三年二月一〇日に出走した忠助は二九日に倉賀野で捕えられ、三月一二日の帰村後、在所に預け置かれた。のちの六月一六日に心得違いを詫びたことから帰参を許され、同二三日には高崎店へ下向している。しかし翌年三月には婦人掛りとして近江へ登され、再び在所に預けられている⁽⁶⁴⁾。また文政一三年三月六日に高崎を出走した治助は閏三月九日に近江に帰り、親類方に預け置かれた。七月二〇日には高崎へ下り、九月六日に帰参を許されたが、天保三年(一八三二)七月の吟味では一四両の取り込みがあり、改心の様子もないことから解雇し店への出入りも差し止められている⁽⁶⁵⁾。

当主の日記や「年々記録」、「歳々記録」によると文化元年から明治元年の間に解雇された者は三一名で、多くは「暇遣し」とのみ記されている。このうち理由が明らかなのは一四名で、「店風二不応」とする者が四名いたほか、「掛金集之内遣込出走致し親元米屋弥七方へ帰ル八拾二

両余引負丑七月暇遣ス⁽⁶⁶⁾」、「不心得二付つれ上り暇遣ス⁽⁶⁷⁾」、「氣随二付暇遣ス⁽⁶⁸⁾」など理由は様々であった。

こうした解雇者へ金子や衣類を渡す例もみられ、文政一二年一〇月の源之助⁽⁶⁹⁾や天保三年閏一月の安吉には解雇時に金二〇〇疋と衣類が遣わされている。また文政一二年六月に暇を遣わされた幸助には心付けを一両、天保八年一月に解雇された伊兵衛⁽⁷⁰⁾にも心付金と衣類が渡されていた。源之助や安吉に渡された金子二〇〇疋については、天保一五年に店で死亡した源治郎の親に「衣類心付金二百疋」が渡されていることから、同様の意味を持つものであろう⁽⁷¹⁾。文化元年から明治元年までの解雇者三一名を当主別にわけると九代目が四名、一〇代目が一名、一一代目が一三名で、解雇時に金子や衣類を渡したのはそれぞれ一名、五名、三名であった。ここから市田家では各代の当主により店を離れる者へ心付けなどを渡していたことがうかがえる。

右はいずれも市田家から解雇を言い渡したものであるが、奉公人から暇を願い出た事例も数件みられた。文化六年三月に初登りをした嘉助⁽⁷²⁾は四月中旬に上州へ下る予定であったが親の病気により暇願いを出している。また安政七年の常七は出走後在所へ戻り、兄が死去したため暇願いを出し、引負分の年賦証文を取ったうえで暇を遣わしている。嘉助や常七は家の都合により暇を願っているが、召し抱えられた翌年に暇願いを出し在所へ差し戻された者や、気ままなので叱ったところ暇願いを出した者⁽⁷³⁾などもみられた。なお文化六年の嘉助については暇願を出した際に「此度下向二八成ましく候得と相考候様申渡置」と再考を促した様子もうかがえた。第一節であげた儀兵衛とあわせ、奉公人の勤続を願う当主の意識をあらわした事例と言えよう。

第三節 高崎店の規則と奉公人

雇用や解雇など奉公人の事例をあげてきたが、さいごに店の制度や当主がどのように奉公人に接していたかを紹介しよう。

市田家においては安政四年に定められた「高嶋店定目下書」⁽⁷⁸⁾や「追演店定目之下書」⁽⁷⁹⁾などに店に勤める者の心得が記されるほか、当主の日記においても一〇代目の日記に「嘉助事金筆筭取扱候儀不宜候間鍵ハ腰ニ下ケ他行之砌ハ卯兵衛出シ入致し候様申渡ス」⁽⁸⁰⁾として金筆筭の取り扱いを指導したほか、朝帰りや、不寝番を守らなかった奉公人を叱る記述もみられた。また高崎店では月に一度の寄合で役職や各種の取り決めがなされており、日記でもこうした寄合の際には「銘々堅固ニ相勤之様申談ス」⁽⁸¹⁾「銘々心得之所申談置」といった記述も度々のこされている。右のように奉公人に対する制度や指導は確認できたが、文政一二年一月五日の記録には表戸を開け酒宴に出かけた者がいたほか、先述の重助のように蔵の物品を盗み出すなど奉公人の慢心や危機管理の甘さもうかがえた。また明治以降の解雇理由に「取込」や「婦人ニ不都合」などが依然としてみられたことは商家において奉公人の管理の難しさをあらわしている。

奉公人の不埒については市田家に限らず他の商家でも同様の事例がみられたが、市田家の奉公人事例では出走者が近江の在所へ帰っている点特徴と言えよう。帰村することは遠からず雇い主に自分の居所が知られることに他ならないが、半月から一月をかけて帰った例が複数みられた。市田家以外の近江商人史料において、奉公人が出走後、近江に帰った事例の有無については今後の課題としたい。

むすびにかえて

市田清兵衛家の九代目、一〇代目の日記や記録を通して当主の高崎店の往来や、奉公人の事例を述べてきた。

八幡―高崎間の往来では九代目はほぼ毎年、一〇代目についても天保六年以降間隔があくものの年に一度は高崎を訪れている。多くは春に八幡を発ち、中山道で高崎へ向かい秋に帰国するかたちをとっている。道中では名古屋を経由し、取引先である白木屋徳右衛門方を拠点に商家を訪ねるなどしていた。こうした旅の同行者は九代目が奉公人を連れず他家の者と旅したのに対し、一〇代目は少人数の奉公人のみを連れることが多いなど当主ごとの違いも明らかとなった。

高崎店の奉公人については文化元年から明治元年の間に五三人を召し抱え、いずれも高崎へ下していた。記録では幾度の登りを経て職階を登る者も確認できたが、出走や不埒をおこない在所へ預け置かれる者、解雇される者などについての記述が多くみられた。解雇者については三十一名おり、大半は「暇遣シ」とされるのみであったが、「店風ニ不応」や「遣込出走」といった具体的な理由も確認できた。市田家においては明治期の解雇理由にも「取込」や「婦人ニ不都合」などがあり、奉公人の管理、監督は商家経営における長年の課題であったと言えるだろう。高崎店では出走した奉公人の多くが近江の在所に帰っているが、これについては遠方に店を構えた他の商家の事例と比較することが今後の課題としてあげられる。

また本稿で取りあげた奉公人の事例は「年々記録」や「再々記録」に依るところが大きい。これらの記録は日記からの抜粋と他の記録による補足がなされたものであり、当該年度の日記との確認作業もあわせて進

める必要があるだろう。

注

- (1) 市田清兵衛文書「年々記録 上文政六―弘化五」家五四、「歳々記録 下嘉永二―慶応五」家五五。以下では「年々記録」「歳々記録」と省略する。「歳々記録」は史料名に慶應五年とあるが、慶應四年につづく記録には年号表記がない。ただし九月に「十五日年号明治元年と改元有之」とあるため慶應四年(明治元年)の記録であることがわかる。このため本稿では「歳々記録」の範囲を嘉永二年から明治元年までとする。

- (2) 宮本又次「近江商人の家訓および店則」二二七―二二頁(『宮本又次著作集 第二巻 近世商人意識の研究』所収、講談社、一九七七年、安岡重明「明治初年における近江商人市田家の店制」(『同支社商学』第一五巻第六号、一九六四年)。

- (3) 上田雅洋「市田清兵衛家の経営」(『近江商人の経営史』所収、清文堂、二〇〇〇年)

- (4) 市田清兵衛家については江南良三『近江八幡人物伝』(近江八幡郷土史会、一九八一年)や『滋賀県八幡町史』(八幡町、一九四〇年)、『近江八幡の歴史 第五巻 商人と商い』(近江八幡市史編集委員会編、近江八幡市、二〇一二年)のほか、『新編 高崎市史 通史編三 近世』(高崎市市史編さん委員会編、高崎市、二〇〇四年)にも上州持下り商人として記述がある。また市田家当主の日記を用いた研究に渡辺浩一「存在証明文書の実践―近江八幡における「御朱印」の保管と使用―」(『国文学研究資料館紀要』第六号、国文学研究資料館、二〇一〇年)や水越充治「近畿東海地方における近世の気候復元―とくに乾湿条件について―」(『京都大学防災研究所年報』二八B二二、一九八五年)などもある。

なお近松文三郎「市田清兵衛事歴」(一―二二)、『太湖』一三四号、一六二二号(一九三七年三月九日―一九三九年七月九日)では、市田家当

主の日記は高崎店を開いた宝永四年からとされるが、現在史料館に所蔵されている日記は文化元年のものからである。

- (5) 市田清兵衛文書、家一〇

- (6) 前掲『新編 高崎市史(通史編三 近世)』三三〇頁

- (7) 杉森玲子「元禄―享保期における商人の往来―上州西部を事例に」(『近世日本の商人と都市社会』所収、東京大学出版会、二〇〇六年)

- (8) 前掲「年々記録」。天保九年七月「関東御取締役分商売体書上ヶ被仰出候二付高崎店宝永年中今太物綿享保十_三己年分質物明和七寅年分瀬戸もの仕来申候段書上ル」。前掲「歳々記録」嘉永五年七月「諸方出店人別書御尋被仰出当店上州高崎田町近江屋孫市江州八幡住居夫々誰々と書上候趣商売質太物瀬戸物絹麻之趣書上ル」。のちに質物は高崎店で重要な位置を占め、「歳々記録」では文政一三年三月二日に本家からの元手金四〇〇〇両を質方・太物方・瀬戸方で割り当て、それぞれ二五〇〇両・一〇〇〇両・五〇〇両と定めている。

- (9) 孫兵衛家、利助家の分家をもつ市田清兵衛家では、本家の子息に分家を継がせるほか本家の娘を分家に嫁がせるなどしていた。その関係については天保一四年の「規定一札之事」(市田清兵衛文書「調印之控 文政一二」商業一六)や一〇代目の「遺言」(同「直良公遺書写 安政五」家二〇)などで触れられ、分家は本家を補佐し、古格を守り儉約を旨とすることなどが定められていた。

- (10) 前掲「歳々記録」。安政七年四月二日「関東へ出店持書上ヶ仕候様被仰出候二付麻屋清兵衛年四十三才家内四人召使男二人女三人メ拾人高崎店商売質物絹麻古手瀬戸物豊表鉄物類渡世人数十人と書上ル」。

- (11) その後長治と為吉はともに高崎店に勤め、度々八幡と高崎を往復していた。なお為吉は文政二年七月に高崎で脚氣を患い、一〇月に帰国したのち一二月に死去している(市田清兵衛文書「日記 市田直徴 文政二」家四二)。

- (12) 九代目には文化元年から文政五年の日記にくわえ、町役についてまとめた「役用日記」が五冊のこされている。内訳は寛政一三年(市田清兵衛文書、都市一)、享保二―四年(同、都市二―四)、文政五年(同、都市六)である。

- (13) 市田清兵衛文書「出府日記 文政六年」都市五。九月一八日に梅原次郎兵衛らとともに八幡を出発、中山道を通り高崎を經由して晦日に江戸へ到着している。日記は途中から筆致がかわっており、「十月廿四日西窪御屋敷へ治兵衛参上市田不快二付」と記されていることから、同行者の手によるものと推測される。なお一月五日付で日記は終わっている。
- (14) 日記では長治と記されることが大半だが、長治郎としている部分もある。
- (15) 前掲「歳々記録」。安政二年六月「讓介六十二相成賀誕可催之所清兵衛病氣二付延引」、安政三年六月二四日「讓介還曆誕生二付護摩執行家内小豆飯二て祝」。
- (16) 弘化二年三月一日生まれ。高崎への初下りは安政五年六月一五日、安政七年一月一七日に元服。文久二年二月二日に発病後、次第に衰弱し三月三日に死亡した。祐太郎の死後一代目と妻知恵のあいだには弘化二年、九年、嘉永三年、五年に子供が誕生しているが、すべて女兒であった(前掲「年々記録」、「歳々記録」)。
- (17) 前掲「歳々記録」。嘉永三年二月一日「お知恵出産女子出生のふと云」、文久二年九月七日「当家表名前之儀近親相談致しのふと定ル」。
- (18) 日記の内訳は九代目(直徴)一九冊、一〇代目(直良)三六冊、市田(小四郎)二冊、一一代目(直廉)一三冊、諦定八冊、直道一冊、義春一冊、一二代目(直方)七冊、一三代目(直豪)一六冊、一四代(直基)三冊、不明三冊である。このうち弘化四年(家七二)、五年(家七五)の日記については表紙に「市田」とのみ書かれているが、内容から相続前の一代目(小四郎)のものであることがわかる。
- (19) 一〇代目は「直良」の諱のほか「諦定」の名で文久三年から明治三年まで八冊の日記がある。なお一〇代目が嘉永二年に隠居した際に改めた名前は讓介(助)で、諦定は法名である(前掲「年々記録」。天保一四年閏九月二日「西光寺貞輪和尚分剃刀頂き三日分五重相伝九日満業なり法名正誓直心諦定居士」)。
- (20) 市田清兵衛文書「日記 市田直良 文政五」家四五。閏一月二二日。また同二一日にも「今夕長治中村春成老にて濃茶」と記されている。
- (21) 同右「日記 市田直良 天保五年」家五九。一月七日「天晴風寒し社参日記 取調記録帳二写ス」。
- (22) 前掲「日記 市田直良 文政七」。六月二二日。
- (23) 「柏原二て辻村田中喜兵衛殿二出合江戸市川へ下向二付同道下ル」(同右「日記 市田直徴 文化六年」家三二。四月二六日)や「敷原川上屋二泊ル 日野西沢重兵衛殿喜藏殿同宿二て同道致ス」(同右「日記 市田直良 文政一〇」家五〇。六月二日)のように、道中で他家の者と出合い同道する例もみられたが、表一では出立時に記された者のみを同行者とした。
- (24) 滋賀大学経済学部附属史料館所蔵「西川伝右衛門家文書」一七二〇―「道中諸人用覚帳」、一七二〇―三「松前下り御旦那様友治郎駒吉五兵衛荷持善兵衛都合五人道中諸人用扣」、一七六一「松前屋初下り饒別土産物扣」。同館所蔵「谷口家文書」覚書五「羈旅国誌」、覚書七「出信小遺帳」。
- (25) なお高崎店の奉公人も八幡と高崎の行き来には中山道をたどっていた。明治に入ってから中山道は利用されたが、「四日市汽船搭載」、「汽車二テ」など移動手段の変化もみられた(市田清兵衛文書「交代録 明治一二」商業四)。また明治二年「旅費仕訳帳」(同右、商業四三)では一二代目が帰国時に人力車や馬車を使ったことも明らかとなっている。
- (26) 白木屋岡田徳右衛門は名古屋の呉服物問屋である。『名古屋商人史―中部経済圏成立への序曲―』(林董一著、中部経済新聞社、一九六六年)には天保一一年二月の長者番付で西前頭に入っているほか、天保一五月には正金融通の世話役に任命、安政三年冬の献金商人の名簿にも名前が載っている。また慶應三年につくられた洋物改所の取締役にも任命された名古屋の豪商の一人である。
- (27) 前掲「年々記録」。文政一二年五月一三日。
- (28) 市田清兵衛文書「日記 市田直徴 文化一〇」家三六。八月二三日。
- (29) 同右「日記 市田直良 文政七」閏八月九日。
- (30) なお当主の日記には奉公人の出入りについても記録されており、そのなかには「廿二日(中略)久兵衛高崎分帰幡ス常吉不埒二付つれ上ル早速親元へ預ル」(同右「日記 市田直良 天保五」家五九、二月二二日)のように高

崎店から不埒の者などを連れ帰った記述もいくつかみられた。

- (31) 文化一三年、次男為吉の初下りの際は名古屋を經由し三の丸などを見物している(同右「日記市田直徴文化一三」家三九)。

- (32) 日記では「三島明神大社」とある(同右「日記市田直徴文化五」家三一・九月一日)。

- (33) 日記では「地鯉鮒明神」とある(同右・九月七日)。

- (34) 一〇代目は翌七年にも高崎店滞在中、八月末に江戸へ赴き三〇日に心行寺で法要を営んでいる(同右「日記市田直良文政七」家四七)。

- (35) 天保四年二月二六日に分家孫兵衛家に生まれ、弘化二年に市田家の養子となった。弘化四年六月にはのちに一〇代目を相続する小四郎とともに初下りをしている。その後、高崎店と八幡を度々往復し、安政四年六月には分家利助家の婿養子となり、讓介の娘久満と結婚した(同右「日記市田直良天保四」家五八、「日記市田直良天保五」家五九、前掲「年々記録」、「歳々記録」)。

- (36) 前掲「年々記録」。天保九年九月二四日「清兵衛藤七高崎店出立にて岩船山出流山へ参詣日光山拝礼致ス夫々江戸へ出山形屋御店ニ滞留致心行寺ニおいて法音居士十七廻忌施餓鬼執行夫々東海道へ志し金沢鎌倉江之嶋秋葉山鳳来寺順拝し名所古跡等遊覧して名古屋へ出向相調十月廿八日帰幡」。

- (37) 九代目は文化六年に息子長治を高崎店へ連れ下り、善光寺へ立ち寄った(市田清兵衛文書「日記市田直徴文化六」家三二)。天保一五年に市田家に迎えられた小四郎の初下りは弘化二年であったが、このとき一〇代目は同道せず奉公人と店へ向かわせている(前掲「年々記録」。弘化二年四月「小四郎義上州初下り二付廿一日振舞致シ廿六日出立庄蔵留吉供治助外ニ源七同道にて下向」)。

- (38) 高崎田町の絹市は藤岡に次ぎ取引高が多い市で、一丁目、二丁目、三丁目の順に五日ごとに市立てが行われた(前掲「新編高崎市史通史編三近世」三三三頁)。

- (39) このほか日記には、蛹や糸などの商品の相場や取引情報、地震や火事についても書き残されおり、このうち「歳々記録」には高崎店に被害が出た地

震について嘉永七年十一月四日(安政東海地震)と安政二年一〇月二日

(安政江戸地震)の二件がみられた。どちらも信州松本や江戸、箱根など遠隔地の被害もあわせて記されているが、嘉永七年は「高崎瀬戸物店釣土瓶落土蔵壁ニ筋出家並ニ諸人表へ出ル」、安政二年は「高崎表古倉壁落候得共家並別状無之」とあるように高崎店に大きな被害はなかった。

また火事の記述は文化四年から文久二年にかけて一〇数回みられ、文化九年一〇月三日、文政一三年一〇月一日、天保一四年一二月一日、文久二年一二月七日には店が類焼したほか、文化一五年九月七日には高崎店の中蔵からも出火している。

- (40) 市田清兵衛文書「交代録明治一二」商業四

- (41) 同右「明治拾貳年改正・全式拾壹年再生支店人員交代録市田本店備本(明治三三)」商業六

- (42) 市田清兵衛文書「市田清兵衛家の経営」二六二頁

- (43) 前掲「条目補遺明治二三」制規三

- (44) 二〇代一三〇代の人物については、文政七年一月に久兵衛の世話役とした又兵衛(三四歳)のほか、天保二年六月の林村孫市の相続人庄蔵(二七歳)などがある。

- (45) 市田清兵衛文書「日記市田直徴文化三」家二九。一月二三日「魚屋町元昆布屋喜兵衛倅卯之介抱エ目見」、一月二六日「子共卯之介店へ下ス」。

- (46) 同右「日記市田直徴文政二」家四二。九月二七日「宇津呂弥兵衛抱エ」、一〇月二一日「今朝弥兵衛宇津呂へ帰ル」、一〇月二九日「宇津呂弥兵衛抱エ」、一二月二日「八幡出立弥兵衛召連兩人にて下ル」、一二月四日「相談之上弥兵衛質方手伝見覚候様申渡ス」。

- (47) 弥三郎については「年々記録」に天保一二年一二月八日「久兵衛上州へ発足上野田作右衛門倅弥三郎召抱同道十九才」とあるが、同年の日記(市田清兵衛文書「日記市田直良天保一一」家六五)には一〇月一日「日野上野田作右衛門三男弥三郎召抱十九」、一二月八日「久兵衛弥三郎上州店へ発足」として、実際の召し抱えは一〇月だったことがわかる。

- (48) 市田清兵衛文書「日記 市田直徴 文化一三」家三九。文政六年二月二二日「寺村善八子友吉抱」。前掲「年々記録」三月二五日「友吉初登友八ト改名申渡ス」。
- (49) 庄蔵の初登りは召し抱えから五年後であるが、召し抱え時の年齢が二七であったことや林村孫市の相続人であったことが関係していたと推測する。前掲「年々記録」。天保二年六月四日「林村孫市相続人庄蔵召抱実父梁瀬忠兵衛二十七才○十四日清兵衛源七庄蔵高崎へ登向」、天保七年一月二三日「上州店今庄蔵初登致ス」。
- (50) 前掲「歳々記録」。嘉永七年六月二三日「金兵衛初登之祝儀遣シ衣類過分之品取上置親庄兵衛呼入店風ニ不相応之趣申暇遣ス」。
- (51) 同右。安政二年九月。
- (52) 市田清兵衛文書「日記 市田直良 天保四」家五八。
- (53) 同右「日記 市田直良 天保六」家六〇。一〇月一七日「店善吉退役儀兵衛当役之趣申聞義兵衛事来春久兵衛方へ相続申付可申段咄し置」。前掲「年々記録」。天保七年三月一三日「上州店儀兵衛帰幡致ス兼て久兵衛方へ養子相談相調廿一日ニ婚礼整ウ」。
- (54) 前掲「歳々記録」。安政五年二月「久兵衛義家内病身ニ付願之通高崎店勤退役申渡ス」。
- (55) 前掲「年々記録」。天保七年九月「上州店民蔵岩蔵義八月廿三日出走之所当月十七日在所へ帰り申候趣届出ル吟味之上預ケ置」。
- (56) 市田清兵衛文書「日記 市田直良 天保三」家五七。七月二一日「店状八日出着(中略) 安吉事七日二四つ時洗濯屋へ使ニ遣し候所帰り不申ニ付昼後尋ニ遣し候所遠ニ帰り申趣之自分単物二枚持出し残り衣類蔵ニ有之早速七蔵惣介追手ニ出シ横川御関所迄窺候へとも行方相知不申之趣申参ル」。
- (57) 前掲「年々記録」。天保二年二月末尾。閏一月六日、宮崎に掛け取りに行った文七は三月末に帰村した。その後舟木村へ預け置かれたが、善光寺参りの供をすると再度出走している。
- (58) 同右。天保一四年一〇月「上州店弥三郎当九日店出走致シ松代へ立寄在所へ帰国之由十一月八日出幡親父死去ニ付打驚心得違仕候旨断申出ル依之慎居候様申置」。
- (59) 同右。天保一一年一二月「上州店吉兵衛義勤方気保ニ付呵申聞候所暇願出候依之五兵衛同道致申候段申付鎮申付置候所二月十三日出走致ス其後晦日帰幡致候段親元鳥屋金兵衛今届参ル扱又店表今反物五拾五反帯地廿六本不足之趣申参候ニ付相尋候所掠取売払申趣致白状候夫今懐中吟味致シ貯金拾両一朱取上ケ衣類売代三両壹歩差引五両三歩余出情証文取之」。
- (60) 前掲「歳々記録」。嘉永二年六月二七日「新七出走いたし七月十日召捕取糺候所質物盗出し質場之金銭掠取出走之節瀬戸物売溜持出し横道ニ付惣助付添差上シ在所へ預ケ置」、嘉永四年八月五日「普光寺村新七出情証文取暇遣ス」。
- (61) 同右。嘉永七年二月一三日「昼後高崎店質物ニ鼈甲取組前倉へ片付ニ参候所箆筒之錠引放し有之候ニ付立合改候所鼈甲類不残紛失銭箱のふたこち放し百錢五拾五貫文紛失夫今裏廻り吟味之所味噌倉二階ニ手拭一筋半股引一足泥まふれ有之十二日夜裏之水道今忍入店之勝手存候者と覚候趣申参ル右手拭重助持居候見覚有之趣也十五日御上へ御届申上候所十九日御同心兩人羽鳥氏御見分之上手拭股引封印之上羽鳥へ御預ケ有之右紛失之品目貫一組小柄刀一本簀一本鼈甲櫛拾六枚筭三拾一本簪廿一本銀簪四本とさせる二本縮緬され一
- ×七拾八品代金五拾両計当百五拾五×文
右注進惣助十四日出立にて廿一日着幡」。
- (62) 同右。嘉永七年六月九日「戸田忠右衛門田中三郎右衛門豊屋理右衛門呼入重助不埒之次第申開ケ取込金返弁申付候所忠右衛門義先年家屋敷等売払門ニ差掛ケ致凌居候様故憐愍相願候ニ付出情証文請取暇遣し請書取置」。
- また市田家において出情証文の記述は先述した吉兵衛(59)、新七(60)、重助(61)のほか次の七蔵と彦七の二例がみられた。なお「市田清兵衛文書」内に出情証文はのこされていない。
- ①前掲「年々記録」。天保八年五月七日「高崎店七蔵不埒ニ付惣助付添上ル致吟味候所山崎屋婦人掛り有之拾四両引負有之候ニ付廿八日野喜助方へ預ケ置」、天保九年三月廿一日「日野七蔵義兄市左衛門より引負弁金二

歩請取殘金出情証文請取暇遣ス。

②同右。弘化四年二月二日「彦七義七日ニ金拾両持出走致し廿九日本持村親元へ帰村致ス此段兄助三郎届出候ニ付預ケ置」。前掲「歳々記録」。嘉永二年五月「本持村助三郎弟彦七引負弁金ニ歩請取衣類売払出精証文請取暇遣ス」。

(63) 前掲「年々記録」。文政九年十一月九日「店源七不心得ニ罷上リ暇願候故在所平柳甚七へ預ル」、文政一〇年四月三日「源七義婦人掛り合有之候所其後久兵衛を以離縁致し改心之上婦參相願候ニ付店不勘定之義相尋候得共難相分候ニ付追て連下リ取調候上勘弁可致旨申渡置」、五月二六日「清兵衛店表へ発向源七嘉助召連ル」。

(64) 同右。天保一三年一月「上州店忠助二十日出走致廿九日倉加野ニて捕へ三月十二日惣介付添婦幡在所へ預ケ置」、六月一六日「忠助心得違之段相詫候ニ付用捨致し婦參免ス」、天保一四年三月「高崎店忠助婦人掛り致候ニ付惣助差添にて登し在所へ預ケ置」。

(65) 同右。文政一三年「高崎店治助義二月廿二日鬼石へ仕入物ニ罷越候由にて倉加野ニ居統致し居依之新兵衛つれ帰り段々相詫申候ニ付廿八日夜引取慎ミ申付置太物勘定相改申候所附立帳面も附掛ケ致し有之当座帳ニても一口取込有之当人引負高メ金百四拾六兩三分拾四匁有之此外掛ケ先滞金過分ニ相見たル依之段々相糺申候所三月六日暮分出走致ス其後閏三月九日二八日市へ帰り申候段治兵衛方分申出候ニ付同廿日ニ当人並勘兵衛呼出し店省略之趣相糺申候所無申訳不届之至之依之勘兵衛へ預ケ置四月廿九日吉田屋惣七掛ケ取立之為差下シ候所半金取立六月十五日ニ婦幡其後改心之趣ニテ婦參相願候ニ付七月廿日清兵衛下向之砌つれ下リ諸色吟味之上店にて相談之所一統ニ婦參相願候ニ付一札取之九月六日婦參免シ和兵衛次席ニ致シ太物小売方申渡ス」、天保二年六月二九日「治助不心得ニ付差上シ早速親類勘兵衛方へ預ケ置」、天保三年七月「八日市治助義段々吟味之所寅九月改大金之引負之外ニ拾四兩程取込致し猶又改心之様子無之候ニ付暇遣し以來出入差止右金子之内一兩弁金並古着代道具代取入殘金十兩」己年十ヶ年清治兵衛内分返済之書付取置之」。

(66) 前掲「歳々記録」。嘉永五年二月「高崎店弥三郎掛金集之内遣込出走致し親元米屋弥七方へ帰ル八拾貳兩余引負丑七月暇遣ス」。

(67) 前掲「年々記録」。天保五年二月二日「久兵衛高崎店分婦幡常吉不心得ニ付つれ上リ暇遣ス」。

(68) 同右。天保五年三月一六日「和兵衛氣随ニ付暇遣ス尤目録差引書相渡シ彦兵衛家跡相統申渡ス」。

(69) 同右。文政八年四月一六日「深河原村源之助抱ル」、五月一八日「清兵衛高崎へ発向源之助下ル十才」、文政一二年一〇月二九日「清兵衛嘉介源之助弥兵衛上州分婦幡源之助暇遣シ金二兩百正衣類遣ス」。

(70) 同右。文政一二年九月「千堂村八右衛門倅安吉召抱高崎へ下ス」、天保三年一二月末尾「安吉義当七月七日店表使先分宅致し行方知不申候所明義宿ニ罷在候ニ付つれ帰り八月附上しニ致シ親元千堂むら八右衛門へ預ケ置閏十一月晦日暇遣シ金二百正衣類相渡ス」。

(71) 同右。文政一二年六月「高崎店幸助義暇遣ス親又助へ一兩心付遣ス」。

(72) 同右。天保三年四月九日「尼子村曾原方伊兵衛召抱廿五才」、五月一六日「伊兵衛店へ下向源七高崎茂兵衛方へ縁談相調下向ニ付同道致ス」、天保八年一月一三日「伊兵衛暇遣シ心付金衣類遣ス」。

(73) 同右。天保一三年二月「極楽寺村藤治倅源治郎十才召抱ル」、三月二八日「庄助源治郎事上州店へ発足」、天保一五年一二月七日「高崎店ニて源治郎死去法名光岳照童子」、弘化二年七月「極楽寺村源治郎衣類心付金二百正親藤治へ相渡ス」。

(74) 市田清兵衛文書「日記 市田直徴 文化六」家三二。三月四日「店嘉助初上名古屋分帰ル」、三月一三日「嘉助在所へ遣ス」、三月一八日「嘉助參宮明日在所分連有之候ニ付十九日立之積ニ申參リ」、四月一九日「嘉助在所分帰ル昨日見被參親病氣ニ付暇願度段承候ニ付其趣当人へ相尋候何レ此度下向ニハ成ましく候得と相考候様申渡置」。

(75) 前掲「歳々記録」。安政七年一月一四日「店常七出走致し二月八日田中村へ帰候段申參」、二月「田中村常七義高崎出走致し旧里へ帰り兄死去ニ付暇願出ル取調候所兩度之引負三拾七兩余有之配分金五兩余有二拾二兩余

用捨致シ十兩の年賦証文取大晦日暇遣し衣類渡ス」。

- (76) 前掲「年々記録」。天保八年九月二日「五兵衛上州へ発足猪ノ子村糸右衛門伴清助改丈助抱下ス」、天保九年五月一六日「儀兵衛高崎へ帰幡丈助同伴暇願候ニ付猪子村へ差戻ス」。

- (77) 同右。天保九年二月二九日「本町鳥屋金兵衛伴吉兵衛召抱」、三月二三日「久兵衛新参吉兵衛文七勇助上州へ発足」、天保一一年二月「上州店吉兵衛義勤方気促ニ付呵申聞候所暇願出候（以下略）」。

- (78) 市田清兵衛文書、制規一

- (79) 同右、制規二

- (80) 同右「日記 市田直良 文政八」家四八。六月二八日「嘉助事金箆筒取扱候儀不宜候間鍵ハ腰ニ下ケ他行之砌ハ卯兵衛出シ入致し候様申渡ス」。

- (81) 同右「日記 市田直良 文政一二」家五二。七月一六日「善助昨夕今朝四ツ時帰り依之呵置」。

- (82) 同右「日記 市田直良 天保二」家五六。九月一〇日「有君様御先荷通ル鋪砂盛致ス本町詰番申附ル倉加野饗応方ニ安吉参ル夕刻通ニ成善助倉加野迄御送申」、九月一日「有君様御通行無滞相済麻小殿入来三番へ買付持参五番口注文致ス昨夜表ヲ明置候ニ付不寝番申付置候所不行届ニ付呵置暮合雨降ル今日庚申之」。

- (83) 同右「日記 市田直良 文政一二」家五二。二月七日「天晴折々雨天（中略）店状正月十八日出内書到着之所正月五日夜幸助義四ツ時表口メリ開鍵ニ致し置九ツ時合夜遊ニ出候所則メリ無之故盗人忍入候」。また三月一二日には「店盗人一儀」として詳細が記され、夜間外出をした幸助の返答とともに、盗人が座敷の障子から入り込んだと述べている。

「付記」本稿は「NPO法人たねや近江文庫」との平成三〇年度共同研究「近世の「日記」にみる八幡商人市田清兵衛家の諸活動」の研究成果の一部である。